

卑弥呼の墓の特徴を発見した

尾道市 河野俊章 171205

紹介文

邪馬台国比定地は、数多くあるが中々特定できない。しかし卑弥呼の墓に何らかの特徴があれば、より確実に邪馬台国が発見できるはずである。

本文

目 次

- I、卑弥呼の墓の特徴を発見した
- II、持論「邪馬台国大隅論」の要約と卑弥呼の墓
- III、本視点が正しいとした場合の資料等の間違い

I、卑弥呼の墓の特徴を発見した

「これが卑弥呼の墓」と言われても、容易には信じがたいのが実情である。しかしもし「卑弥呼の墓を含む他少数の墓にしかない特徴」があれば、有力な証拠となる。またそれは、「邪馬台国の発見」にも直結する。

その特徴は魏志倭人伝の研究者ならば誰でも知っている一文「殉葬者奴卑百余人」を少し掘り下げれば浮上してくる。

卑弥呼が死んだ時、女従者百人以上が殉死している。これは大変なことでその後の長い日本史の中でも、例を見ない殉死者数である。

何の為にそんなことをしたのか？もちろん**死後の世界で卑弥呼に仕えるため**である。

生きていては卑弥呼に仕えることは出来ない。死後の世界に行っても卑弥呼の近くにいないといけない。その為には卑弥呼と同じ墓の中に埋葬せねばならないし、**卑弥呼の近くに埋葬せねばならない**。

もちろん迷信であるが、死後の世界の存在をより強く信じていた古代では当然と思われていたことだろう。

原文でも単に「殉死」ではなく「**殉葬**」と書かれていることも見落としてはならない。**殉葬**とは正に上記の意味で、中国の古墳では結構多数見られるやりかたで、「主に従って死

に、主の近くに埋葬される」埋葬形式である。

私自身その方面の知識は余りないので、間違っていたら「ゴメンナサイ」であるが、日本ではこれは余りに「おぞましい？」やり方なので、だいたい三世紀末には「埴輪で殉葬に代える」ようになったらしい、と理解している。従って卑弥呼の墓（三世紀中葉）がほぼ殉葬者を共に埋葬する形式の終りごろとなるのではないだろうか。

生前の従者が卑弥呼と一緒に埋葬されているのである。卑弥呼の墓には、もちろん卑弥呼の石棺があり、他にもう一つの殉葬者の遺骨を入れた石棺があるのである。

重要な所なので繰り返し書くと、「卑弥呼の石棺の近くには、**奴卑百余人の遺骨が殉葬されている。（これは確実なことだ）その百余人の遺骨は「(おそらく確実に) 主従の差がはっきりしたもう一つの石棺に入れられている。その石棺には百余の遺骨が入っている。ただし、高温多湿の土地柄、遺骨さえも分解してしまっている可能性もある。しかしその石棺は確実に現存しているはずである。それが卑弥呼の墓の必須の特徴である」。**

但し、二つの石棺があれば卑弥呼の墓と言う意味ではない。それは他にも殉葬者のいる墳墓があるからである。中国ではかなり多いようだ。しかし日本ではそれほど多くの殉葬者のある墓があるとは思われない。

従って**卑弥呼の墓の特徴**をまとめれば下記5点である（補注などは下の□）。

- 1、 その径は 150m ぐらいである。
- 2、 墓の中には卑弥呼の石棺の他にもう一つ石棺がある。
(その石棺の保存状態が良ければ 100 人以上の遺骨がある)
- 3、 前方後円墳である。(可能性大)
- 4、 邪馬台国比定地にある。(当然)
- 5、 埴輪はない。

上の補注など

- 1、 原文「倭女王卑弥呼以死大作塚径百余歩」（魏志）「歩」は当時の長さの単位で「一歩」は 145 c m とされる。従って「百余歩」は $145m + \alpha$
- 2、「もう一つの石棺」は殉葬者の遺骨が入っているはずだが、百余人は多すぎるので、遺骨の一部（多分頭）であろう。
- 3、 卑弥呼の墓の形状についての資料はないが、前方後円墳は邪馬台国（天皇国）の重要人の墓であるので、ほぼ確実に卑弥呼の墓もこの型と思える。

II、持論「大隅邪馬台国論」の要約と卑弥呼の墓

上で、「卑弥呼の墓には石棺が二つあるはず」と述べたが、一つの墓の中に石棺が複数あ

るかどうかはそう簡単にわかるものではない。しかし「卑弥呼の墓を比定している邪馬台国論」であれば焦点が絞られる。

以下は私の持論であり、卑弥呼の墓を比定している。自画自賛などの観点から、いやーな感じを持たれるかもしれないが、出来れば我慢してご覧頂きたい。

但し、私の邪馬台国大隅論を、ここで詳しく述べるのは冗長の感があるので、要点のみを一覧表で示すに留める。更に對海国（対馬）～奴国（福岡）までは大勢（たいせい）の見解が一致するところなので省略する。

論の大前提として、先ず魏志倭人伝の「陸行一月」を間違いと見る。正しくは「陸行一日」ではないかと仮定して論を進めてみる。結論を言えば、それで無理なく論の展開が出来た。

大前提	魏志倭人伝の「陸行一月」は「陸行一日」の間違いと仮定して論を進める (詳細)
-----	--

① 邪馬台国大隅論の要点のまとめ（不彌国以降のみ、詳しくは[文末欄外参照](#)）

魏志の地名など	比定	比定の主要な根拠例
不彌国	洞海湾周辺	小舟の係留に絶好の地形、他 2 件
投馬（ツマ）国	西都市	ツマという地名が残る 他 3 件
邪馬台国	肝属平野から西の錦江湾まで	水行十日で上陸した地点は肝属川河口（ここも良好な小舟の係留地）他 8 件
卑弥呼の都	鹿屋市付近	肝属川河口から「陸行一日」他 1 件
邪馬台国の墓地	唐仁古墳群	約 1 3 0 もの弥生時代の古墳が現存する他 3 件
卑弥呼の墓	大塚	魏志に書かれている通りのサイズ、他 4 件

② 取り分け「殉葬」の面から卑弥呼の墓について考察する

上記のように持論では、卑弥呼の墓の比定は、大塚であるとしてきた。その根拠は主に、1、大塚が魏志に書かれているサイズ {百余歩} に完全一致する。2、大塚は邪馬台国の墓地と思われる唐仁古墳群のなかにある。3、埴輪がない、などの件に加えて、ここでは特に、4、殉葬者の棺の問題について検討する。

持論ではこれまで何度も触れていることであるが、大塚には特異な状態がある。そ

れは多分造成後間もなく、未だこの大きな墳墓に草木が生えないうちに、豪雨によって墳頂の土が流失してしまったらしいことだ。

新造の墳墓の盛り土が豪雨で流されるということは、多分どの墳墓でもあり得ることで、常識的には土が流失したら管理者が補修する。しかし、多少無理な推測かも知れないが、大塚の場合は造成はしたが、ケアする人はいなかったのではないと思われる。

その原因究明はさておいて、大塚頂上部は土砂の流失で、石室が露出し、石室のある部分では人が入れる程度の穴が開き、幸か不幸か誰でも中に入れる状況にあった。昭和初期には学究の志が中に入り石室および石棺を精密にスケッチし測量されている。故に大塚は発掘調査しなくとも、内部の状況がかなり良くわかるのである。

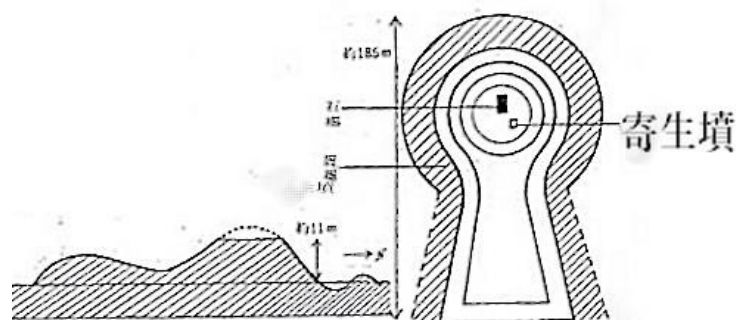
更に幸運なことには、その有志の記録によると、石棺が開けられた形跡はない、ということである。

ここで重要なことは、その有志、実名を挙げると、山崎五十磨と言う方だが、大塚には主たる石室の他に、もう一つ小型の墳墓があることに気付かれスケッチ、測量されている。

氏はこれを「寄生墳」と呼ばれているが、その**一見妙な現象、墓の中にまた墓がある理由**については言及されていない。その後も多くの研究者が目にされていると思うが、言及はない。

私はこれが「殉葬者の石棺」と強く信じる。しかも「主たる石棺（石室の中の石棺）は卑弥呼のもの」と思っているので、この「寄生墳」は、魏志が記録している殉葬された「奴卑百余人」を収容している石棺ではないかと推測しているわけである。

大塚古墳平面図



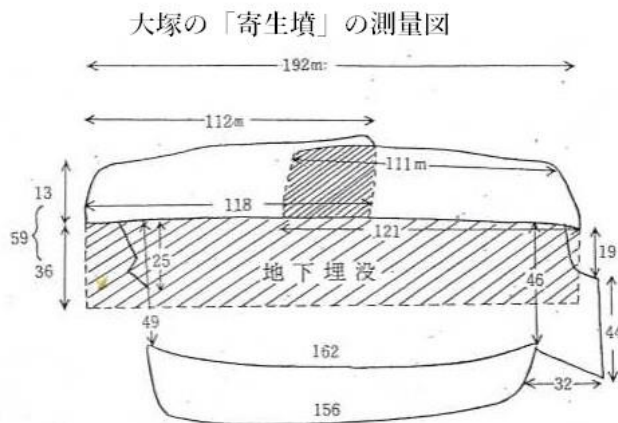
東中良町教育委員会

黒い四角形は卑弥呼の石室、寄生墳と書いてあるのが殉葬した奴卑を収納している

石棺と私は思っている。

尚、ここでは深くは触れないが、山崎氏はスケッチした卑弥呼が入れられていると思える石棺について、「石棺の下石と蓋石が一枚石で、丹念に鉄のみで細工された美しい大きいもので、全国的にも数少ない誇り得る一品である」と描写されている。

主観的な表現で申し訳ないが、上図、殉葬石棺の配置は中心線を避けた控えめな配置で、まるで「従者が頭を下げて待機しており、女王から声がかかればすぐ飛んで行き仕えることが出来る配置」のように見えるが、いかがなものであろうか？



上の「寄生墳（私が思う「殉葬者の棺」）」の測量図は昭和46年、北園、島戸両氏によって作成されたものであり、その説明は以下である。

- 1、石は花崗岩の板石
- 2、側面の深さ 59cm位、36~61cm埋没している。
- 3、床面は粘土か、礫らしい。
- 4、西側のものは二枚合わせ、湾曲している（私注、やや意味不明、蓋石が二枚と言う意味か？）

これは私が「奴婢百余人」を収納した殉葬者の石棺と思うものの測量図である。百余人を収納するには小さすぎるが多分体の一部、多分頭だけを入れたのであろう。

古代中国では殉葬者のある墓が多い。そんな発掘写真を見ていると、下のように頭蓋骨多数の殉葬者の写真があった。



安陽殷墟・侯家莊 M260・人頭殉葬祭祀坑。

(西暦 1934-35) 河南安陽殷墟 (商 {殷} の時代末期) の出土

予想では多数の殉葬者が入っているとしている大塚の石棺も当初はこのようなものだったのではなかろうか。しかしここ大隅は高温多湿の土地柄である。1800年近くも昔の話であれば、骨さえも分解され消滅してしまっている恐れもある。

この石棺を開けてみたいが、そう簡単には行かないだろうと思えるが、じつはこれ悩むことはないようなのだ。この石棺はその上蓋は露出しているのだ。開けてみようと思えば簡単に開くはずなのだ。発掘など必要がない。

誰でもと言う訳にはゆかないが、有資格者が近いうちに開けて見られることを切望している。

分解して消滅しておれば仕方がないが、もし上の写真のような状況であれば、それは即邪馬台国の発見につながる。1メートルばかりの石板を持ち上げる、それが邪馬台国発見への最短距離かも知れない。

なぜなら、これほど多数の殉死者を伴う古墳は卑弥呼以外にはないとほぼ断定できるし、この周辺はやや薄れてはいるが、邪馬台国の気配が漂う場所だからである。周辺には異様なほど多数の古墳があるし、この大塚のすぐ下流は神武東征出発地と伝えられている (つまり、この地は大和朝廷のふるさと=魏志の言う邪馬台国、ということになる)。

Ⅲ、本視点が正しいとした場合の資料などの間違い

本論が正しいとすれば、現存する資料等の間違いを指摘することは容易である。それは表裏の問題で、資料の方が「絶対に正しい」とすれば、本論が間違いである。

本論が正しいとすれば、資料などの主要な間違いは、わずかに次の2点だけである。

1、魏志倭人伝の「陸行一月」はやはり「陸行一日」の間違いであった。

これについては、私の創案ではないので説明は省略する。詳しくは下記リンクなどご覧いただきたい。[「陸行一月の問題」](#)

- 2、 唐仁古墳群の「大塚」の造成は、五世紀末とされているが、それは卑弥呼の墓であるから、その**造成は当然三世紀中葉**である。

本論での結論は別としても、「大塚は五世紀末」の鑑定は変である。近くの大崎市に「[横瀬古墳](#)」があるが、これも同じ五世紀の造成とされている。[横瀬古墳からは埴輪が大量に出土する。](#)そのことからだけでも、五世紀鑑定に異論はない。

一方、[同じ五世紀造成とされる「大塚」には埴輪がない。](#)それどころか「寄生墳」と名付けられているが、これは明らかに「**殉葬墳**」である。それは日本では少なくとも**4世紀以後の古墳にはないはず**である。

「大塚五世紀判定」のもう一つの根拠は「石棺の横に五世紀に盛んに作られた短甲があった」と言うことである。

疑問点を挙げると、そのような判断は当然、墓の造成と短甲の埋葬が同時と言うことだ。ならばこれは副葬品と言うことになるが、短甲と言う当時ではごくありふれたものを、それも一個だけをしかも石棺の外に置く、そんな副葬品は考え難い。次に「短甲は五世紀に盛んに作られたから古墳も五世紀だ」と言うのは根拠薄弱である。

この石室には穴が開いており、誰でも入れる状況だったことを考慮すると、例えば、後代の誰かが、処置に困った短甲を持ち込んだ、とか言うような思いがけない事件のように思えてならない。

なお、この**短甲は現在は粉末化して「存在しない」**とのことである。

しつこく私の疑問を言えば、「短甲があった時期（1930ごろ）」から「分解していたころ（多分2000年ころ）」の期間はわずか70年である。わずか70年でこのようなものが消滅する、それが高温多湿の威力である。それが同じ保存状況で、定説の五世紀（450年）から1930年まで、ほぼ1500年もの間「形をとどめていた」とはとうてい信じられないのである。

おわりに

上は随分と省略した論である。詳しくは下記拙著等を参照して頂ければ幸いである。

「予言 大隅邪馬台国」「古日向邪馬台国」（いずれも牧歌舎）但しこれらを作成した時期にはまだ「殉葬」の知識がなく、それへの言及がない。以下のWEB版では上記二著の全文に加えて「殉葬」問題も必要に応じて加筆の予定である。

[WEB版「大隅邪馬台国」](#)

邪馬台国大隅論の比定地（やや詳しい表）

[{もとへもどる}](#)

魏志の地名など	比定	比定の主要な根拠
不彌国	洞海湾周辺	<p>1、天然の良港</p> <p>奴国から船に乗らずわざわざ、「東行至不彌国」と歩いて東へ行ったのは、そこに、大嵐、台風が来ても安全な絶好の小舟の係留地があったからである。</p> <p>北九州でそのような「天然の良港となる地形」を捜せば、それは洞海湾である。現在はほとんど埋め立てられているが、それ以前、江戸時代以前は大海、燧灘に向かう入口は狭く、内側は広く浅く、小舟の係留に絶好の地形であった。船にとって一番恐ろしいのは台風で、現在は人工の防波堤で安全な良港は多いが、当時は「天然の良港」は非常に貴重な存在であったに違いない。</p> <p>ともかく陸路のない当時、大国間の交通路は海しかなかった。そのような大国ではかなりの嵐が来ても船が壊されない港は、必須の地理条件であった。</p> <p>「天然の良港」は地図を見ただけで誰にでもわかる。北九州ではこの洞海湾が最高の場所だ。</p> <p>この地の昔の正確な地図は多分、明治10年ごろ作成の国土地理院のものである。魏志の時代とは大差があるが、余り干拓が進んでいない時期の地形は、昔の地形にかなり近い、と思われる。</p> <p>(最古の正確な地図)</p> <p>2、沿岸に岡田宮がある</p> <p>古事記の神武東征の所に、神武船団が岡田宮に長期滞在している。それは北部九州が大隅邪馬台国のいわば出先機関であったので訪問、滞在したのであろう。その岡田宮が洞海湾沿岸にあり、神武船団もこの安全な良港に多くの船を係留したことが伺える。</p>

		<p>3、魏志は「東行至不彌国百里」と記している。洞海湾はかなり内陸に食い込んでおり、奴国からは、ほぼ平坦な陸路でその最奥部に到達できる。真東ではなく正確には少し北よりである。</p> <p>正確な距離は45キロ、一里は450mとなる。許容範囲内であろう。</p>
投馬（ツマ）国	西都市	<p>1、ツマという古代の地名が今でも西都市の中心部の地名として現在でも残っている（妻という漢字が当てられている）都万神社もある。(現在の西都市の地図)</p> <p>2、魏志の旅程、北九州から見て九州東岸のほぼ2/3の所にある。</p> <p>3、古墳が多くあり古代から栄えた地と理解できる。</p> <p>4、一ツ瀬川河口に砂洲が発達しその背後にある水域が天然の良港となっている。</p> <p>【参考】本居宣長以来古くから、西都市の地名、妻（つま）を魏志の「投馬国」に比定する説がある。 従ってこの比定は私の創案ではない。</p>
邪馬台国	肝属平野から西の錦江湾までの一帯	<p>1、九州東岸の投馬国（西都市）から見て南ほぼ1/3の所にある。（魏志に書いてある通り＝以下魏志と省略す）</p> <p>2、東西で海に接している。（魏志）</p> <p>3、気候温暖、冬でも野菜が採れる。（魏志）</p> <p>4、邪馬台国は北に伊都国を置いていた（魏志）</p> <p>5、径150m程度の卑弥呼の墓（候補）がある。</p> <p>6、邪馬台国（日本名＝天皇国）は先祖の墓を大切に する習慣があったので、当時の古墳が沢山ある。 唐仁古墳群など</p> <p>7 天皇国があったのならそれなりの伝説などがあるはずである。「日向神話」がある。なお古くは今の薩摩、大隅、日向を総合した地域が日向であった。</p> <p>8、次の日中の2文は同じ事を言っていると理解すべきだ。</p> <p>日本側は「日向が奈良へ行って大和朝廷を造った」と伝える（古事記他）。</p> <p>中国側は「魏志の書いている邪馬台国の者がヤマトに</p>

		<p>都を造っている」と伝える（隋書、北史 注＝都＝国の中心ときめた大きな町）。</p> <p>つまり中国側は「大和朝廷のふるさとは（魏志の）邪馬台国だ」と記録しているのだ。</p> <p>9、肝属川河口には、山脈状の海岸砂丘がありその背後に小川があり良港となっている。</p>
卑弥呼の都	鹿屋市付近	<p>1、投馬国から「水行十日」肝属川河口から「陸行一日」、徒歩で一日の所にある。</p> <p>2、鹿屋市の王子遺跡はその都の一部とみられる。</p>
邪馬台国の墓地	唐仁古墳群 （近くの塚崎古墳群も邪馬台国時代かも、だが資料不足）	<p>1、約130もの弥生時代の古墳が現存する。現存するような大きな墳墓は、時の支配層の墳墓である。庶民が現存するような巨大墳墓を造るはずがない。</p> <p>従って、この地を邪馬台国が支配していたのならば、この唐仁古墳群は「邪馬台国の墓地」であった。</p> <p>2、卑弥呼の墓候補がある。</p> <p>3、前方後円墳がある。（邪馬台国の代表的墓の形態）</p> <p>4、埴輪は出ない。</p>
卑弥呼の墓	大塚	<p>1、魏志に書かれている通りのサイズ</p> <p>2、殉葬墳がある。</p> <p>3、邪馬台国の墓地と見られる唐仁古墳群の中にある。</p> <p>4、埴輪が出ない</p> <p>5、邪馬台国の象徴とも言える前方後円墳である。</p>

{もとへもどる}